

科学図書館ブックレット

結婚 三角関係 離婚

山本宣治著

科学図書館



結婚 三角関係 離婚

—— 一青年生物学者の考え——

山本宣治

目次

序	五
男女に優劣はない	六
配偶者の候補を比較の上、自由選択	七
理想の愛人と現実暴露	八
相互調整と硬化固定	〇
一方の生長停止と互の隔たり	一
離婚予防の秘訣	三
かくあるべき結婚の定義	三
此結婚生活に対する恋愛	四
恋愛は結婚の必要条件か	五
恋愛はあった方がいい	六
現世の事が第一 それから子供の事	七
自由恋愛と自由結婚の権利	八
産児は権利か義務か	八

産児は夫婦の自由	一九
産児が危険有害と期待された時の結婚	二〇
離婚の解決	二二
多角関係は実際不可能	二四
三角関係が結婚前後に於ける違い	二四
生物学上男女の根本の相違	二六
男達の考えて居る事	二七
譬え話 第一 辞書としての妻	二八
譬え話 第二 小説としての女性	二九
女には小説を読む権利がないか	三三
現在の結婚制度	三四
家畜数の制限と其所有問題	三七
結婚の三角関係は理論上存在不可能	三九
現実暴露は改造の準備	四〇
まず第一に自己保存	四四
一夫一婦制と一時的変態	四四

結婚生活は経済現象
一夫多妻制は一時の変態
父を確かめる必要上の同棲
将来或は同棲が無用か
我等何をなすべきか
至上主義一天張りは世間見ず
ブルジョアに濫用されんとする至上主義
説のあらまし

序

人類以外の動物は今日ある事を感じずる許りで明日ある事を知らず、唯本能の導くがままに生殖の事を行い種族保存の実を全うして居る。理智を具えて生れ出た我々人間は之に反して、理想に憧れ、将来を思い、子孫の事を慮って居り、雑駁で纏まりの付け難い諸種の本能を整理し之を統御しようとして試みて努力精進をして居る。即ち豚や牛馬に罪を犯し得る自由意志が無いと共に、有徳なる猿も居ない。一方に於て人は罪を犯し得る自由を有すると共に、進んで、有徳の人たり得るの自由がある。此所に万物の靈長たる人間の尊嚴が存すると共に、所謂「獸性」を統御せんと試みて事志と違い、煩悶する人間独特の悲哀がある。

斯様な立場から見れば、人類以外の動物には生殖こそあれ、結婚という文化的行為は無い。だから無論生物界には結婚もなければ離婚も無い。生殖に就いての多角関係はよしあっても、恋愛の三角関係などは無論人間以外に無い。

此考えから出発して、一個の生物学研究者たる私は、他の生物の性生活を参考にして、我々の「かくあるべき」結婚生活の始終を考えて見たい。特に断っておく事は、此説は私一個の解釈であって、従来世に多く行われた人間の生活を強いて畜生の生活に引摺り下して汚そうと試みる「偽悪者」の自称科学的人生觀とも大分趣きを異にして居る。

男女に優劣はない

女の頭脳の重さが平均男のそれよりも百二十グラムだけ少ないから、百二十グラムがた女の方が低能だとか、或は猿より三本毛が多くて男より三本毛が足らぬ者が女だとか、或は髪長ければ智慧乏しとか、色々な事を云って其「低能」な女に失恋したらしい女嫌いの男は空威張りをして居るが、此様な見方は、男女の特性が或能力を所有する量の多少に因んで居る。即ち同じ能力をば、男は多く女は少なく所有して居るのだと解釈するものである。

併し乍ら公平な生物学的智識の教える所によれば、両性は質の違いであり量の差でない、即ち男女に優劣はない。唯双方互になくしては立行かぬ一半、此半人前を二つ合わせて初めて人間一対が出来る次第である。

所で本来優劣が無いのだから、今迄の様に征服者対奴隸、或は主人対下女、或は飼主対家畜の如き一種の強迫的主従関係は、之迄女性をなみした（軽蔑して無視すること）男性文化の中に於てこそ存立はしたが、将来解放されるべき全人間の社会に於ては全然不合理のものであり、追って自然消滅をなすべき運命を有するものと見る外はない。斯様にして将来の結婚に於ては、まず第一に結婚当事者が互になくしてはならぬ一半である事を自覚しなければならぬ。即ち結婚の一要件として相互の同格性承認がある。

配遇者の候補を比較の上、自由選択

扱さて男女が互たがいに同格だと認めた上で、其等そのな異性の数ある中から此人このこそ我意中の人と、自由意志を以て選えらまなければならぬ。家の為ためだから是非せひも無いとか、親の仰おほせの重ければとかで、泣きの涙で嫁入りするのは、暴力に對する屈服忍従であり、何等なんら自己の主張が無いのだから、眞の結婚と云う事は出来ぬ。又異性でさえあれば誰でもと、近づいて来た者の第一に引かれる者ならば、其所そこに何も選択が無いから、之も眞の結婚でない。

併しかし悲しい事には今の日本の現状では、多くの異性を危険無く比較し選択し得る機会が少ない。親と世間とが馬鹿だから、娘の童貞を、まるで真空にしたガラス瓶の番をする様に、後生大事に守つて居る。

所で用心堅固過ぎるものだから、水に譬たとうれば「浅く共塞ともせけば溢あふるる川水の」だ。土手に蟻の穴があつても其所そこからドーツと流れ出す。電気で云えば電位差が高まって一寸ちよつとした機会でもすぐ爆声を發して火花放電をする。星と董すみれとスイートホームの名に憧あこがれた過去の新人の「自由結婚」の中の或あるものは、お氣の毒乍ながら此種の火花放電であり、電位が平均した後に「何だい之は、オヤオヤ」と幻滅を感じた人もあつた。今恋愛至上主義の名許ばかりで自己陶醉に耽ふけつて居る若人達の中にも御仲間があるうが、唯偶然に会合あひいし或は唯近く住んだ丈だけで配偶關係が

成立つのなら、動物の生殖と別に異なる所が無い。

其所で過渡時代の此欠陥を補う為には自由無碍な社交の機会を与えて比較選択の便宜を作り、同時に色魔や不良少年を見分けて自身で蹴飛ばす丈の強さ、賢さ呼び起さねばならぬ男女共学も其手段であろうが、惜しみ惜しみ少し宛思わせ振りタップリでは却って危険が多い。性教育と同様に、共学でもやるならひと思いに隔ての垣を撤廃しなければ、却って危い。

理想の愛人と現実暴露

所で此人こそと思う人が實際世の中に居るか。成程若い浪漫的な気分に充ち充ちた頃には、どんな寂寞を感じて居る時でも、深い絶望に陥った時でも、此広い世界の何所にか、私を待ち構えて唯一人の異性が居るのだという信仰を呼びさますと、忽ちに一道の光明が現れ、一脈の温かさが心の中に湧いて来る。

併し段々世事に馴れ自己の特色も徐ろに發揮して来ると共に、其様な空想が漸くに消滅して来て、一体其様な「理想の異性」が実在して居るかと疑い始める。此場合に出る態度は二通りで、穩健派の方はそうそういつ迄も贅沢は云って居られぬから、此辺で我慢しておこうと、之迄厳しかった理想の標準を引込めて、今度は目前に実在して居る相手にあてはまる様な極く内輪な注文文にして置く。急進派の方は大抵気が早いから慎重熟慮する暇も無く没頭

する、忽ち幻滅が来る、すぐ匙を投げて又追究を始める。中には峠を越えて彼方に展開する新天新地に憧れる気分で、峠を越えては又次の峠と、終生恋愛巡礼を続けて、終には常暗の国に迄久遠の女性を追掛けて行く。之は特に男の方に著しい特徴である。所で、

「同一種の動物の中でも外部性的器官の形や大きさは区々である。特に分化著しい人類のそれは、男女の顔が異なるが如く多種多様である。其故に任意の一对の間に完全なる調和適合を欲するのは、種々の鍵を或錠前に手当り次第にあてはめようとするが如く、分化が進んで居れば居る程困難である」(十九世紀のドイツの動物学大家ロイカルト)

成程我等は文化人として、精神生活の内容が豊富になればなる程、共鳴理解し得る相手の数が少なくなる。即ち性的器官でなくても、我等の精神生活の錠前は金庫のその如くに複雑になって居る。一方原始人の錠前は、我々の裏の炭小屋のその如く、出来合せの鍵で滞り無くあげられるのだ。

けれども性的器官に限らず、我々人間の一切は、鍵や錠前の如く固定造りつけて融通の利かぬ窮屈なものじゃない。併し今迄の人間には大抵野蛮人から受継いだ原始的考え方が残って居り、何でも固定したものに考え直さないと納まらぬ。例えば国家という考えでもそうだ。結婚生活でも結婚式当日に落成式を挙行した鉄筋コソクリート建築物で、鶴は千年亀は万年の後迄も修繕せずに残るものだと考えたがる。そして新婚の当日から夫から

妻に「理想の佳人」であり又「よりよき一半」である事を要求する。

所でよつく反省して御覽、その花婿御自身が「理想のハズバンド」であるか……。鏡と相談してから物を云えというのは、唯に顔ばかりの問題でないのである。

相互調整と硬化固定

何しろ当人自身をかくあるべき自分に叩き直せない位だから、相手が当方の固定した要求の通りに完成して居そうな筈がない。併し結婚の實際に於て、進んで結婚したのと、強いられて式を挙げたのに差別無く、何しろ胸がワクワクして居るから、相手が理想的な様に見える。やがて其甘い夢が覚めて苦しい現実に触れた時でも、ピツクリして引退くというのは非常に勇敢な人か、又はよくよくの場合の事丈だ。其所が錠前や鍵の様な死物と異なる人間の特色で、一方の欠けたものは他が補う。一が或点で後れて居たなら急に驀進を試み、他は歩調を緩めて追付くのを待つて居るといふ風に、相互の調整が始まる。此相対性継続關係が結婚生活の本来の中心であり、どちらか一方が死ぬ迄不絶一進一退、変化極まり無き流動である。「跳躍する生命」其ものである。

所が実験心理学の教える通り、智的慾求に於て、女の欲する物は固定完成したものの、男の求むるは生長変化するものである。実業家で云えば前者は銀行家、後者は株屋である。一は

堅固である代りにボロイ事は無い、他は山カンで剣呑な代りに興奮と刺戟に富んで居る。

で斯様にして、女は天性自づから結婚生活の初めに既成完備を求め易い。既に相当の地位財産ある者を選まんとするのは敢えて日本の御婦人に限った事ではなく、又其れが生物学的に当然であり、決して悪い事だとは申すのでない。併し乍ら結婚とは日比谷大神宮神前に式をあげた後カメラの中に入り、それがやがて何々画報に登載された事によつて千秋楽を告げるのでなく、之は唯ほんの前芸で、それから後の色々の変化発展が結婚生活其ものなのであるが、前申した通り女の考え方は完成既定に安んじて居る許りで、例えば夫君の地位は上る共下る事は無いとか、収入は増す共減ずる事は無いとか、又彼の愛は永久に変わる事がないとか、彼が他の女に愛を移したり、或は彼の首が切られる心配は無いものと安心して、其まま老い込み易い。殊に玉の如き愛子を儲けた場合などは殊に安心が其極に達して、唯さえ静止不動停滞に陥り易い女の精神的な生活が、はたと行詰つてしまふ事が多い。

一方の生長停止と互の隔たり

「生命とは内外の關係に於ける不断の調整である」(ハーバート・スペンサー)

「万物は流動する」。結婚生活にしても日々其環境の変化に順応して其内容を新たにしておく事は、即ち前述の生命の定義通りであり、此際配偶者二人を一の単位とする一個の有機体

の生長進化と見做す事が出来る。然るに何事も三三九度と或は又七五三の祝いに、自己の將來は完全に保証されたと考え易い多くの女性の内面生活は、大抵行詰りになる。日本の文化の現状では、日々無意味な機械的労働の繰返しに伴う多忙が、婦人の智的生活を空虚索莫たらしむる事も事実だ。之を気の毒だと思ふならば、我々の家庭に労力と時間とを節約し能率を高める為に、必要な設備を輸入せねばならぬ。併し斯様な余裕のある家庭にしても、尚離婚や三角関係が時として起るのは何故であろうか。

成程それには暇すぎるから、其時にあり余ったエネルギーが遊戯的恋愛に注がれる事も、幾分あろう。併し乍ら私の見る所によれば、大抵の家庭葛藤は、妻が家庭生活の安易固定に馴れて精神的に静止するが、一方家の外では夫が不絶世智辛い又刺戟の多い環境の中で不断的生長を続けて行く。即ち一進一退余り遠くは離れてならぬ間柄が段々隔たつて行く。其揚句男の活動の範囲は広くて、其所に又不断的生長を続けて居るチャーミングな女性にもぶつかる機会が多いから、単一の相対関係が変化して、二つの相対関係の組合せに始まる所謂三角関係が生じる。そして其緊張が極端に及んだ時に、一方のが切れて其所に離婚となる。

即ち三角関係や離婚を惹き起す筋道は大抵之であり、其よしあしは暫く論じないが、兎に角不絶併行して進むべき二人が、一方の静止不動によって全然交渉の無い他人同士になろうとする。此際種々の因襲という首環が双方の首に巻付けられてあるから、心の中は他人同士

又は敵同士であっても、外見だけ道づれの様な顔を装って空虚な後半生を過す者は甚だ多い。

離婚予防の秘訣

此様な困難は、第一に女の方で結婚生活は不断の努力、永遠の行進である事を始終念頭において、配偶者との相對關係に緊張を失わぬ様に注意する事、之と同時に男の方では、配偶者が天性固定静止に陥り易い事を常に念頭において、不絶彼女を助け励まして自分との隔たりが遙かにならぬよう、密な精神的接觸を続けねばならぬ。其為には無論繼續して同棲する事は、互の生長を調整し調和を求むる為に必要であるが、且又単調から来る退屈を予防する為には、併せて配偶者の有難味がわかる様に、時々短期間の別居も望ましい。尚又其一对の趣味にもよるが、双方のお望みならば時々適度の夫婦喧嘩も亦面白かろう。併し此様な事は一々説法は無用と心得るから省略する。

かくあるべき結婚の定義

以上述べ來つた事を基礎として一寸しち六ヶしく結婚の定義を下して見れば……

結婚生活とは、一人の男と一人の女とが、夫々予め多くの候補者を比較した上で自由に選み出して配偶者と定め、そして互に同格な事を承認した上で、其後の一生を二人一体とし

て送ろうと試みる継続的意志が行為に表現されたものである。

此結婚生活に対する恋愛

「結婚は恋愛の墳墓である」という云い方に従って、恋愛を解すると、私の所謂結婚生活に入らんとする予備時代に於ける当事者双方の不安や緊張した白熱的気分と希望に充ちた歓喜等の総和が、恋愛と云うものであるらしい。

恋愛至上主義者否寧ろ其追従雷同者とも申すべき人々は、斯様な「恋愛」に出発しない結婚はよし円満であり互に理解があり幸福であっても、それは檻に入れられた猿の雌雄の幸福に過ぎないと迄も極言したがる。

所で私も恋愛の功德をも認める、否功德という様な功利的表現は全然避けて、私自身が其甘くあり又苦い恋の甘酒に死に至る迄浸りたいと思つた者ではあるが、併し自分が第三者の位置に立つた時には、昔渦中に奔走した時程に夢中になつて、ラヴは人生の始めなり終りなりと絶叫する事は出来ぬ。

如何となれば、白熱氷をも溶かし自らをも燃やし立つべき恋愛の焰を不絶燃やし続くべきようもない。斯く芸術に不朽の跡を留め、後の世の人を悦ばせ且泣かせ、老いたる人を常にありし日の思い出に若返らせ得るラヴは、此人生という交響樂の高調である。一度味わつて

は再び其れを繰返し得ない天与の美酒の陶然たる酔の極みである。其れは永き人生の中の最も重要な一刹那であり、時こそ短かけれ、吾人の一生の焦点に位して居る。熱烈であるが為に短い、短い為に麗しい。其故に或特殊な天才、例えば八十幾歳迄も不老の恋愛巡礼を続けたゲーテの如きはさておき、世間一般の人間にはそう緊張と不安と熱情と歡喜とが久しく続きそうな筈がない。

続くというなら、其れは熱情の小出し月賦払いであり、又慢性アルコール中毒者の果敢ない恍惚であり、我等が一生一代の大事たるラヴという其名に相当するものではないのだ。

恋愛は結婚の必要条件か

所で斯様な恋愛が私の所謂結婚生活の必要条件であるか。……否、日本の現状を広く見た時に私は其れが必ずしも必要でないと云いたい。そして前に述べた如き恋愛至上主義者が一時の興奮に駆られて、恋愛に始まらぬ結婚生活は檻にほうりこまれた猿の雌雄だといった事に対して、断然反対を唱える。

如何となれば、思慮深い両親や先輩の賢明な選択の下に行われた仲介結婚の多くで、其初めには散文的、事務的であったものが、年月経る内に生長進化して、理解、同情、調和、敬慕にみちた理想的母を造り上げたのを眼前に見る事が出来るのではないか。

恋愛は盲目である。其時の白熱は如何なる物質的障害をも焼尽くさねば止まぬ。双方の天性や趣味や教育が非常に懸け離れて居ても、其前には問題にはならぬ。上下の隔ては無いというのも、其当時の気分としては如何にも御尤もだ。第一それでないと芸術は成立つまい。併し其熱がいつ迄続くか、跡は永い後半生の事だ、青春病の恋愛至上熱が醒めてから、どうしますか。無論播いた種は当人達が刈り取る外はないから、大抵の事は双方で我慢するのが当然なのだが、辛抱の無い又身の程を知らぬ自惚れの強い男などは早くも逃出す様な事もある。中には御念の入った宣言を発表して新しい求婚広告に代える者もある。刹那を重んずる恋愛なら必然の結果なのだが、現状維持を好む女性が好んで選ぶ運命でない。

斯様な危険はあらゆる場合に伴うとは限らないが、今の過渡期に於て唯無自覚にジャーナリズムの鳴物入りの駆ぎに浮れ出す男性の或者には、一世一代の大事業であるラヴの真意義を解せず、其れに伴う重大な責任を解しない様だ。理智の尊いものによらず、唯獸的接觸慾の衝動発作を恣にしようとして、此耳新しい美名を借りる者も可成あるらしいから、其等に対する女性側の自重警戒を必要とする。

恋愛はあつた方がいい

一方恋愛を真剣に考える人の中には、其重大さと真剣味におじけづいて、ふぐは食いたし

命は惜しとウロウロして居る内に、何か時の行掛り、潮時の調子で、極く無邪氣平凡に結婚生活の中に入つて、平和に納まり返つて居る人も可成多い。斯様な有様を目の前に見ると、結婚の前提として恋愛の必要有無は、各人の趣味の問題でなからうか。

趣味は理屈を超越するのだから、是非ラヴが無ければという側の人は、御注文通りにせられるもよい。併し象牙の塔を出た文学者（厨川）の様に、因襲的結婚の空虚に憤慨するの余り、誰彼の見境も無く、ラヴの美酒を強いられるのは、世の下戸たる者の聊か迷惑とする所であらう。

私自身は矢張御同様に上戸党に属する一人であり、結婚生活の内容豊富な為には最初の陶醉があつた方がよいと思うが、扱て誰にでも其盃を押し付ける程の勇氣を持たせない事を残念に思う。

現世の事が第一　それから子供の事

扱て前述の結婚生活の定義を云い直せば、結婚生活という此結合は所謂「靈肉の総和たる全人」の遺憾無き合一である。……而して健全な両性の順当な結婚に於ては、其必然の結果として種族保存の実が挙げられる。即ち我等の望む結婚は現世の事を第一とする、子孫と其将来の事は其上の事だ。之が従来の偽善的有識者や職業的愛国者や又は優生学者と自称する

牧畜家と異なる点で、産児器械として妻を迎えた女大学一流の考えを、根本から排斥せざるを得ない。

何故にそうであるか、其れは現代人に自明の事だから今詳しくは述べない。

自由恋愛と自由結婚の権利

人は一度此世に生を享けて現れて以来、他人の生命と幸福（財産と私はわざといわぬ）とに害を与えぬ限り、此生命を維持し其存在を主張し得る権利を持つて居る。更に進んで解放の新時代に入った将来には、私の信念に拠れば、誰しも自由に恋愛に酔い自由に結婚し得る権利を有すべき筈である。

今でも有して居るのではないかと問い返す人が居るならば、其れは其人の考え違いだ。資本主義制の荷した重荷の下に悩む貧乏線以下の男女は、結婚し得る権利を奪われて居る。或は又貴族と称する特殊階級を見よ、彼等は自己の発明した因襲という箱の中に窮屈な生活を送り、自由に恋い自由に娶り得る権利を奪われた憐れむべき者、否自ら棄てた愚かな者であるのではないか。

産児は権利か義務か

然るに一面に於て種族保存にあづかる事、即ち生殖産児は一体権利か義務か。

ブルジョア政府は労働搾取の為に「賤民」共の労働能率の低下を惹き起すと見たら、出来るなら性的享樂を為すの自由をも奪いかねない。併し一方に於て過剰労働を掠奪する為に潤沢な予備隊を備うべく、労働者間の出産率減退を憂いて産児制限の宣伝を妨げ又は之を禁じ、健全なる児を多く産む事は国家に対する忠義であると云つて居る。

之では生殖は義務の様であるが、一部優生学者が社会に好もしくない連中の生殖能力を取上げる事をもくろんで居る所を見ると、生殖は一種の権利であり、世間に迷惑を及ぼす子を出鱈目にへりばなす事は、取りも直さず此権利の不当行使であり、取締りを要すると見る次第である。

産児は夫婦の自由

如何様にしち六ヶしい法律の術語をふり廻して、二百理屈をこねても、結局子供をうむとうまぬは夫婦の自由である。イヤならうまぬ丈の事であるが、イヤだと申しても、今日の避妊法では到底素人の思う様に、或は藪医者が法螺を吹く程に、自由に行くものでない。若し避妊法が完全に効を奏する時には、女は誰も子を産む事はあるまいなどと取越苦勞をする男も居るが、それは結婚前の不良青年か、切捨て御免の強味を失うまいとする遊蕩児の考え丈だ。

本能的に血を分けた児を欲する事に於て或は女親に劣る事もある男親でも、時が来れば矢張子を求むる様になる。即ち自分の陥った誤りも避け自分の行い得なかつた事もさせて、自分の限りある一生にやりおおせなかつた事を、其子に自分の分身としてやらせたいと望む觀の心は、靈魂不滅の教えに憧るる一本能の尊い表現である。だから自由に任せておいても決して子供をポイコットする様な心配は御無用である。

産児が危険有害と期待された時の結婚

斯く自由選択、自由恋愛、自由結婚、自由産児と根本の考えをきめて掛れば、色々の難問題の手掛りも自然つく訳だ。

性教育の必要を宣伝し乍ら生物学を修めて居る私に屢々問われる事は、問う人が遣伝学上好ましくない素質を有して居る事を自覺して居る場合に、それでも結婚したものであるとかという問題である。成程多くの優生学者は生物学の名によって斯様な結婚の禁止を命じて居る。之は結婚の唯一目的を産児と見るならば、如何にも種馬、種牛の掛けあわせを支配する調子で、そうも云えるだろう。併し乍ら我々は人間であつて牧場の牛や馬でないのだ、人間である以上、恋愛の自由、結婚の自由の主張をするは当然である。

所で最後に産児の自由と云う問題になると、此世に未だうまれ出でない子供自身の事も考

えねばならぬ。即ち子には親を選み得る自由も無く、親が希望し又は希望せぬに頓着無く、母の胎内に宿った以上、時熟して娑婆の太陽を仰ぐに至る次第だから、生み落とされた子が親を恨み呪う事のない様に、且又其子が他人の子を傷つけたり色々の迷惑を掛けるのを見て、親たる者が堪えられぬ程の苦痛を受ける事の無い様に、初めから夫婦双方承知の上で自由な産児の事だから、進んで親たるの樂しみも之に伴う苦しみが恐ろしいから、放棄して子を産むまいと決心し、尚其上に其決心を実現する為に適確な方法を執るのは、私は至当たと信じて居る。

斯様な難問を抱いて居る人は大抵世に勝れた人に多く、殊に遺伝の恐れありとして居る性質が真に遺伝性ありや否や、今日の遺伝学では尚疑問として居る程だ。其故此際、種馬、種牛の様に人を産児器械と見做して居る優生学（しかも幼稚な学問）が、よし其結婚を否認したとて、結婚が夫婦互に其事情を理解した上の同情で築き上げられるのは、双方の先見と思慮があるならば寧ろ望ましい事、又禁じようとしても禁じ得られぬ事柄である。

離婚の解決

次に離婚の問題であるが、之は前に繰返したように、初めにろくに考えもせず選みもせず人にから強制せられた結婚や、一時の空騒ぎに五色の酒や親鸞上人やと同じ様に、流行物の

ラヴの名にかぶれ、「浮気は其日の出来心」とはまり込んだ「恋愛」や、之等の後始末の離婚沙汰ならば、ブッキラボウに云えば身から出た錆なのだから、御本人同士で離れる共逢い戻共それは御自由だ。

併し大抵の場合双方自惚れタップリ、自分の悪い所を棚にあげておいて、もっと好い相手と要求される積りなら、それは悪い根性だ。少しでも妥協調和の踏出しが築かれたのなら、其のまま双方共我慢しておき給えと、御忠告申し上げる。但し理屈で行かぬ行掛りと感情の食い違ひもある場合には、そうも行くまいから、どう共御自由におやり遊ばせ。

扱て其次は、私の云うかくあるべき結婚の条件にあてはまる様なものであり乍ら、光陰の移り行きと共に双方の歩き方が段々隔たつて来て、終に其れがごまかし切れぬ程になった場合の事だ。

元来科学は世界を狭くしたと同時に時間をも縮めたのだから、吾人の一生涯は目まぐるしい変化に富み、昔人の一生に幾倍する様な内容を具えて居る。昔の人がまあまあと棺に入る迄我慢して居た事でも、我々なら十年、二十年もたたぬ内にぶつかつて、双方共に目を白黒しなければならぬ事も起り得る。元々世間で誰もが生存競争の駆足をして居る以上、日本の「奥様」のようにさざえの殻に閉じ籠って居てはとても今日の日も過す事は出来ぬ男や、又一部の女は、こつちが足弱でも駆出さねばやって行かれぬのだ。同じ屋の棟の下で雨露を凌い

でも、住む世界がかけ離れて来ると、路傍の人同様になる。

更に進んで之が気まづい誤解や取返しのかかぬ出来事の生じた事等の為に、敵同士の様互に白眼をむき合う様になった時はどうか。

一体こう云うハメに陥つてから今更妥協や調和が出来る位なら、初めから不和や隔たりが生ずる筈が無い。所で世間の口の端に掛るのがうるさいと云うのなら、まだ世間がこわい内だからやさしい。家族の手前恰好が悪いという内ならまだ解決も出来る。併し其不和が公けになり、子供の前も憚らず、親が互に敵視する程になったとすれば、最早一刀兩断の外はない。子供としても冷え切った家庭の中で敵視を傍觀し、或は敵対行動を仲裁し、或は一方に同情して加勢応援しなければならぬとすれば、彼等の将来にとつて非常に有害である。

其時は速やかに其後双方の独立生活を出来る丈幸福にやって行ける様に、物質的要件を公平に按配した上、永久に分離するより外はない。此場合彼等の結婚生活が極めて短日月の内充実し終り、其使命を果し終つたのは悲しむべき事であり、彼等が元は具えて居た調和、協働、同情を失って硬化し終つた事は、悼むべくも又是非無い事である。

斯様に述べた例に漏れた場合は、もはや議論の余地も無い不合理なものであるか、又は明白に合理的なものだ。例えば某女史の家出と離縁状叩き付け事件の如きは、空虚な唯一片の形式に蓋われた内容の暴露に過ぎない。

多角関係は実際不可能

芸術家ではあるが矢張文筆労働者である事を免れぬ小説家が、食わんが為にやむを得ず、其所此所の雑誌に原稿稼ぎをおやりになる有様を横から覗くと、舞台次第で一生涯懸命にやったり、好い加減に見物人をなめて掛って調子を下げ掛ったり、仕振りこそ変るが、極く少数の天才は別として、大抵の御方は同じ事を色々に云い直して居るのに過ぎないようだ。男の考え方を実験心理の方で女に比較すると、随分趨異性に富んで居て単調でないというのだが、或一時期に或人の頭の中を占めて居る事件がそうそう多くない事は、小説家の様な天才文学者諸君の作品に徴してもわかる。

斯様な天才に於てそうなのだから、まして我々一般俗人がそうそう同時に頭を多方面に働かす事は、実際不可能である。よし一見して多方面の活動をして居ると思われる場合でも、其真相に立入って見ると、全力を注ぐべきものと他をきっぱり区別をして、精力を注ぎ熱中するの、そこ宜しく手加減が自然に加わって居る事を、発見するのである。

三角関係が結婚前後に於ける違い

扱て斯様な人間の生れ付きの傾向が恋愛葛藤の三角関係の中に演ずる役目を見るに当って、

結婚の前後によって非常な相違がある事を注意せねばならぬ。

但し此際前後と云ったが、何の前後であるか、之は人々の趣味や信仰によって異なり、相互の童貞の終結とか、人前の披露の結婚式とか、又は事後承諾の要素である妊娠とか、色々であるが、兎に角に当人二人が認めて、一時代を区切った出来事と思うものを指しておく。

所で其前に於ける愛人同士は唯希望に充ちた歓喜に恍惚として周囲を忘れ、過去と将来とを没却した現在に酔って居る許り、拘束も無い、圧迫も無い、何一つ浮世の苦勞も其瞬間に忘れられてしまう。其瞬間と云ったが、瞬間が事情によって一日となり一週間となつて次の瞬間に移る事となる。其時は大抵誰でも暴風激動期なのだから、事態が確定した様でも其実不安定であり、次の瞬間に入つて更に力強い異性の出現肉迫に逢うと又新たな驚喜と希望が生ずる事も起り、其各々の瞬間に時間の前後、事の因果順序を忘れ果てる白熱火の中に没入する。

斯様にして生ずる恋愛の多角関係は其実時間の考えが其都度に消し去られるから、各々の瞬間に於ては純真な単一の相對關係であり、唯困る事には前後の瞬間が互にずれて一對二と云う様な(例えば二人のますらおに云い寄られて煩悶した菟原乙女)ジレンマに及んだ時、池に投じて双方に義理を立てるか、義理という様な古臭いものに目も呉れない現代人ならば、是か彼かに手を差延べて、立所に三角關係の埒を明けてしまう。大抵話は結局の所、此所へ落ちるの

だが、それでは小説なら原稿に書くのに短か過ぎるから、引延ばしてある許りの事である。

すなわち即ち恋愛に於ける三角関係は、本来恋愛なるものが瞬間的の火花である以上、永続するものでない。そして其孰れにして当人二人が進んで飛込んだ事業なのだから、傷つくのも得心づくだ。第三者が兎や角心配しても左右し得られるものでない。静電気に譬えれば、陰電気を負うた一点に対して陽電気を荷せられたA Bの二点が対立する様な場合で、電位差の最も大きい方とパチと火花を放ったが最後、事は終つてしまふ。即ち恋愛に於ても生存競争、自然淘汰が行われるのは此世の中の常法であり、如何共致し難い事を誰でも会得しておく事は肝腎である。

生物学上男女の根本の相違

結婚に於ける三角関係となると、前のが瞬間的であり、第三者の干渉を容れる事が出来なかつた微妙のものであるのと違い、之は継続的であり、又多少共当人二人許りと云わず、第三者に影響を及ぼす程の対外関係を具えて来て居る。所で其れを述べる前に先ず、生物学から見た男女本性の相違を考えておきたい。

すべての動物に於て、卵は大形であり栄養分を豊富に貯え、一所に静止して精子の進入に對して居る。一方精子は小形であり、体の大部分は運動器官であり、活発に運動する。此雌

雄両性の生殖細胞の形の違いは、人類許りでなく、あらゆる動物の両性の特質を象徴的に現わすものと見做してよからう。即ち女は守成的建設的、男は攻撃的破壊的である。

そして人類に於て、男がよし教養に富み豊かな自重心と努力精進の志を有して居る人でも、矢張心の底に多妻主義的傾向を秘めて居る事は、よくもあしくも、斯様な生物学上の普遍的事実なのである。

男達の考えて居る事

其等の男同士が語り合つて居る時は、愛を求める男が愛人の前に出た時の様にオツオツしても居ない。又多くの識者の記された婦人雑誌向きの原稿の文体の如く、しかく他所行きの懇勳鄭重さもない。彼等の会話は私の此文の如く「あらまあ随分だわ」である。粗暴である代りに至つて簡單明瞭だから、時間も空費せず誤解の生じる事も割に少ない。

其男が妻としての異性を現にどう思つて居るか。私は彼等の心中を推測して次の様な譬え話を作つて見て、色々な境遇にある男達に其觀察の正しいか否か、意見を叩いた。多くの男は卒直に其れが自分の思つて居る通りだと答えた。其内の或者は附け加えて曰く、そうは考えて居るが色々境遇の都合で実行しないか、又は行ふ事を制して居る丈の事だと云つた。

少数のピューリタンは黙して答えない、恐らく言語道断の女性観だ、縁無き衆生度し難し

と許りに匙を投げて居るのだろうか。扱て真正面から駁論を叩き付けて呉れぬ所を見ると、彼等も或は心ひそかに此解釈を是認して居るのかも知れぬ。

「すべての人は、彼の脳中に於ては、性的犯罪者である」（ドイツの犯罪学者ヴルフエン）

所で次の譬えでは、配偶者をば物もあるうに、生命も無い一個の物品になぞらえてあるから、「解放された婦人達」から途方も無い女性侮辱だと柳眉を逆立てられそうであるが、男という劣等な動物が実際そう思つて居るのなら、不愉快でも一応参考の爲にお目に掛ける事は必要であろう。

こういう風に觀察して居る男が多いという丈で、此見解が正しいと私はいふ者でないから、私がお叱りを受けぬ様前以てこわごわお断りしておく。

譬え話 第一 辞書としての妻

妻は多くの男にとって書齋に常に備え附けた大辞書か百科事典である。妻以外自分の心を誘う女性は、例えば詩集小説のたぐいである。

スタンダード辞書を座右に離さぬ彼は、愛用すると云い乍らABCと各頁を一々目を通す訳でない。息もつかずに字引をば初めから終り迄棒読しようと試みる馬鹿も無い。よしあつても、終り迄続くものか。

併ししか通読しないから尊重せぬかと云えば、決して決して、もし泥棒なぞにさらわれたら早速、「字書やアイ」と鐘太鼓で探し廻らねばならぬ。愈々いよいよ紛失したときまると、今更に字書の有難味が肝きもに銘めいじて、或男あるなぞは「失いたる字書を惜しむ」小冊子を自費出版して、ありし昔に其れそを粗末に取扱った幾分の罪滅ぼしにしようとした。併ししかいくら惜しんでも返らぬものは仕方が無いから、やがて字書第二世を探しに出なければならぬ。男は慾の深い動物だから、前のよりも新版で内容の豊富なものを注文するが、やがて注文通りのものが手に入っても、兎角とかく逃げた魚のが大きくて前に紛失させたものと比べて難癖を附けたがる。例えたとば前は装釘そうていは粗末だったが、内容が豊富であったのに、今度のはイヤに天金や革表紙許ばかりケバケバしくて、其割そのに中身が空っぽなどと、小言こごとを云う奴も居る。併ししか中身も見ず、初手から天金革表紙に惚ほれ込んだのは自分なのだから、今更事新しく小言こごとも云われた義理であるまい。字書でも銘々めいめい特長があつて、慣用の符号とか分類配列の順序を充分飲み込む前は、自由に使いこなす事が一寸六ヶしい。他の或男いわの曰く、字引が手馴れる迄までには少なく共十年は掛る、俺の年配で之から十年も其為そのために費すのは損だから、字書無しに辛抱しんぼうしておくと云った。此述懐を聞かされたのは或有名な漫画家であつた。無遠慮な男の中でも、特に漫画家は無遠慮鉄面皮な者だから、早速さつそくそれでは字引なしに、今日の時世をどうしてやって行けるかと、御面おめん一本参った所が、鉄面皮な点では其漫画家以上の男も、流石さすがに顔を赤らめて、それはね、小

説というものもある世の中だからと、お茶を濁したそうだ。

小説をコツソリ読んで字書参照の代用にしようとは太い根性だが、此太い根性がなければ、とても世智辛い世の中で華族や大臣になる事は不可能だろう。

譬え話 第二 小説としての女性

小説というものは本来食うに困らぬ者が過剰エネルギーを処分したり、退屈紛らかしに道楽に読むものと私は近頃考えて居る。もつとも或論者によれば、真の芸術品は食う物を食わず共、之さへ味わえば命が繋げる、否死んでも本望だというが、私の様な俗人は矢張侍の子でなく素町人の子だから、腹がへったら無論ひもじうござる、して又命に執着があつて、犬になつても豚になつても此世に生き残つて居て、昔虐げられて居た大衆が段々勃興して行き、石に挫かれた雑草がむくむく頭をもたげる一陽来復の春に廻りあいたいと、ひたすら此世にしがみついて居る次第。元々芸術は閑暇の産物ならば、ブルジョア芸術の、やれプロレタリア芸術のと喧しい近頃のワンワン騒ぎは、之も亦暇つぶし、就中ブルジョアを撲殺すべしなどど犬殺しめいた絶叫は正気の沙汰と思われない。閑話休題……

扱て男が暇つぶしの為過剰エネルギー処分の為読もうとする小説は、此世の中に数え切れぬ程存在して居る。頑固な人間共は此沢山な小説が目障りだから「男ハ小説ヲ読ム事ヲ禁ズ、

之ヲ犯ス者ハ……」なぞと脅かす様な仕掛しかけで以て、小説道楽をやめさせようともくろむ人も居る。又秦の始皇帝の様に小説焼払いの計画をする蛮勇家もある様だが、小説を濫造らんぞうさせる様に出来上つて居る目前の経済組織を叩き直さなければ、世に小説の種はつきめえ。

斯か様に多い小説は孰いれも用不用を超越した贅沢品ぜいたくひんだから、実用向きの字書よりも装釘が美しく且変化が多いのは当然である。之が個性の発達した文明国であると各々特色おのおのを發揮して皆各々おのおの自分を讀ませようと、中には人を脅かすような警戒色迄塗り添えて、我ここにありと許ばかりに頑張がんばるが、日本の様な（丘教授の語を借れば）模倣專一で個性を没却した半開国では、小説迄までが何かなしに流行を追つて、布がはやれば布許ばかり、ポプリンならどれも之これもポプリンと耳かくしや市松模様と同様に、無自覚な人真似をする。或表題あるが人氣に投じると、其それをもじる。本でも女性でもお化粧になると変りがない。生物学上の擬態保護色に相当する現象があり、針もたぬ蠅が蜂の様な形を装つて人を脅かす様に、内容のつまらぬもの程仰々ぎょうぎょうしい道具立や紙数でおどかすものもある。

人の好奇心を唆そそる為ために、態わざとアンカットという様な面倒な仕掛をして、金を出して買わねば中身が容易に知れぬように仕組んであるが、切らねば読めぬ綴じ方で表装の美しい物程油断がならない。好色な男が童貞追究を楽しみとするは、好書狂ヒプリオフエアがアンカット頁を竹刀しなで断つ時、未知の国を開いた様な悦よろこびを抱くちくに比ぶべきものであろうか。此際このさい小説愛読者の中には、

つまらぬ小説でもアンカット頁を切断するのが楽しみだという人と、そんな面倒な事は御免だ、人の読みさしでもいいから内容のシツカリした物を希望する二型がある。

扱て此小説の読み方を見れば、元来遊び半分に読むものだから、無論寝転んで読む、端座して読まなければならぬ様なカテカテの物は、初めから相手にしない。所で寝て読む内に、二、三頁でこいつはつまらないとほうり出すのもあり、すっかり捕虜になつて幾日幾晩夜の目も寝ず、食うものも食わずに読破するものもある。併しいくら熱中しても尋常の心理を合わせ居る人ならば、其愛読の小説が気に入ったからとて、字書の代りにしようとする事もあるまい。情に厚い又生活に追われぬ人なら、愛読書は書架に載せておいて、時々取出して表紙を一瞥して、ああ此本は面白かったと、昔の気分を思い出す位な処だ。更に貧乏な読書人になると読み殻はすぐ古本屋へお払い下げになり、其資本に更に若干の追加をして、又新刊の小説を求め之に新しい刺戟興奮を得、且新思潮に触れようとする。

此小説道楽が少年時代に始まる時は、世に字書という重宝な物がある事を知らずに、唯小説の新刊をのみ漁り求めるのに汲々として一生を過す事もある。之が所謂ドンファン生活である。

女には小説を読む権利がないか

斯様な見方が、新時代の賢明な女性のお氣に入ると入らぬとに頓着無く、現代日本に於て多くの夫たる者の公けに行爲として外に表現し、或は心密かに抱いて居る所の、妻としての女性観である。妻たる婦人が、如何に夫たる男性を観察して居るか、其れは女性側から卒直な突撃を試みられなければ、我々男には判明しない。

所で此警えを聞いてうなづいた一人の男は、然らば妻として女は小説を読み得る権利を有して居ないかと反問して来た。私の見る所によれば、元来斯様に配偶者の人格を認めずに、物品視する事は、其配偶關係の成立がそういう唯物性を帯びて居る不当なものだから、其結果として生ずるので、かくあるべき結婚生活が一般に普及すれば、斯様な不都合な見解は自然消滅をなすであろう。併し乍ら、唯今眼前の過渡期に於て、今迄虐げられた女性が覚め始めた時、反動氣分で何でも男の真似をしたがる。出もせぬドラ声を絞り出そうと試みた政談演説は、無礼な男の為に野次り倒されるが、若し女でも小説を読もうと一念発起したならば(実行に入った人もあるが)、それは物好きな又道楽氣の多い男性の事だから、小説候補者は乏しくない。

斯様にして恋愛を弄ぼうと試みるのは其方の自由だが、一寸前以て御注意を申し上げたいのは、前述の生物学的男女の相違の事である。即ち解放は解放でも、解放された本性は男のそれと別物である。別な本性を展開活動する際に、男のそれを無自覚に模倣するならば、そ

れこそ三本毛が足らぬと口の悪い男に罵倒される許りでなく、とんでもない悲劇的運命に陥る事になりますぞ。

現在の結婚制度

一体こんな色々不届きな見方が生じるのは、此世間の我々の眼前に存する多くの家庭生活が不届きなものであるからなのだ。不届きな物を見て不届きな解釈を下しても当然で、別段当方が不届きだと、お叱りを受くべき理由は無い。筈である。

私は之迄かくあるべき結婚生活の諸要件を考える許りで、目前の結婚生活の実状は余り云わなかつた。併し乍ら今此所に其れに評価を加えなければならぬ。

現在日本に於ける多数の結婚生活は、私を見る所では、私有財産制の一変形であり、夫と一う占有者が、妻と名づくる家畜を養い、之を性的快感を得る為の機械として用い、又同時に之を屠らずに食物とする場所である（非科学的庖厨生活の内に妻の血肉をそぐ事は、取りも直さず彼女を食う事になる）。

妻を機械から昇格させて奴隷だとすれば、結婚生活は夫と称する主人が、妻と称する奴隷を飼ひ、此奴隷をして昼は家事を処理せしめ、夜は寢室の世話をさせる事であり、疑うべくも無い一の奴隷制である。

家畜ならば系統が判然して勝れて居る程、買う時高価だ。奴隷ならば柔順勤勉である程、高価である。家畜にも奴隷にも人格は無いから、唯作業能率を高める為に調教を試みる、此調教訓練を称して、良妻賢母教育と云う。但し此調教者が余り有能でないから、名前の看板とは正反対に、奴隷制から見ても牧畜術から考えても、能率の低い物許りが生産されて、實際は愚母悪妻教育になって居る。近頃之ではならぬと、流石感じの鈍い牧畜家や奴隷養成者も頭を悩まし始めたが、調教能率を高める為には先ず第一に人格を認めなければならぬ。併し飼主や主人と同等な人格を認めるとすれば、現在の私有財産制や奴隷制が根本から顛覆する。即ち彼等の語を借れば、祖先伝来の醇風美俗が破壊されるから、痛し痒しで大煩悶をして居る。併し下手の考え休むに似たり、煩悶して居る内に、家畜も奴隷も自覚して差別待遇撤廃を要求する様になった。

本来、此制度の下にあつては「分際」という語が喧しく云われて、「女の分際」で（即ち家畜の癖に奴隷の癖に）男子と（即ち飼主や主人）と同じ物を食うのは生意気だとあつて、特に家畜向き、奴隷向きの食物が準備してある。之が女学校教育と婦人雑誌と称する物であつて、飼主と主人が御免を蒙り、匙を投げ辟易した低級下劣の材料許りが振向けられてある。併し家畜扱いされ奴隷視されて差別待遇を受けても、結局女は人間であるから、自分で自由に人間の要求する物を選ぶに至つた事は、悦ばしい事である。

但し一部の女には家畜根性と奴隸氣質の名残りが残つて居て、特にいたわつて貰わぬと、虐待された様な僻み根性を起す者もあるが、全く同格の者なら、殊更に「御婦人」とか「女の女」とか「お女中」とか御機嫌を取る必要はあるまい。男が単に男なら、女は単に女と呼ばれて、別に侮辱を加えられたと思うに及ばぬ。

昔世間の誰もが人のよい頃には、此物は某の所有と札を立てて置けば、先ず誰も手を出さなかつた。性的奴隸制では焼印を押す代りに、お齒黒を塗らせたり丸まげを結ばせたり、唇の廻りに入墨をさせたり、種々の形式を以て斯様な占領済の広告をしたものだ。現に何々ホテル何々軒に於て催される披露会は、進化した形式を具えた家畜飼入広告である。

斯様に披露した上飼い入れた家畜が時として飼主の氣に入らぬ場合には、すぐ遠慮無く野原へ放逐して、新鋭の者を求めて再び披露するか、又は勘定高い飼主になると、そんな無用の出入に消費は面倒だ、之も節約の時節柄で古い家畜は其ままにしておいて、新しい実用的のを今度は広告せずにコッソリと飼い始める。

それから此牧畜家共が更に団結をして何とか階級とか云う一大トラストを形成する段になると、飼主が自由に家畜を選む権利を有しないで、唯其トラスト全体の利益と継続を爲すに、幹部が選んであてがって呉れた種牛、種馬のお守りをしなければならぬ。併し飼主でもすきな家畜を選みたいのは山々なれど、出鱈目に余所から買つて来るとトラスト全体の家畜

の尊い血統の純正を傷つけるといふので、やむを得ず辛抱して居る。若し自由選択を断行しようとするれば、其牧畜トラストから除名せられるか、又は自ら進んで脱退しなければならぬが、大抵は飼主迄が家畜の氣風に同化されて順良に去勢されて居て、其まま長い物にまかれて居る。

トラスト員は大抵其組織で漁り得た暴利の分配に与るから、生活の余裕があり過ぎる程だ。其所で牧畜の相間には音楽を味わったり画を描いて見たり、中にもオツチヨコチヨイの飼主共は、はつぴをきて公園に飛出して来て、下司下郎の真似をして草むしりをしては世間の物笑いとなり、又トラストの親玉から睨まれる種をまいて居る。どうせ氣まぐれにあちこちと浮気をする発作だから、音楽でも画でも生物学研究でも草むしりでも長続きはしないが、閑居不善をなすとは事変り(小人と申しては失礼千万だが)、いずれも至極結構の道楽だ。

道楽を自慢にして仰々しく恩に着せたり、広告をさえしなれば、吾人トラスト外れの人民でも、別段抗議を申し立てる必要を感じない。且又其退屈に苦しむ惰民生活に焼餅やく程のさもし根性は無いのである。

家畜数の制限と其所有問題

利己主義から出発した私有財産制でも、飽く事の無い私慾が社会連帯感に衝突した際、多

少の修正を必要とする。俺おれの儲もけるに何も干渉は無用だと資本家は頑張がんばるが、結婚という名を冒おかした此この牧畜事業に於おいても、元は家畜を飼かう実力さえあれば（甲斐性さえあったら）、幾頭でも飼かい放題であった。遠く支那やトルコの牧畜業を引証する迄までもなく、偽紫田舎源氏にせむらさきいなかげんじでも何百という数を養ったとあり、よくも一人の飼主で手が廻まったと驚くが、實際其飼主の下に準飼主とも云うべき者があったのに相違そういな無い。併しかしそれも昔の物語、今文明の昭代となつては、斯かくも多数の家畜を一個人で占有するのはいかんという事になったが、それも表向き丈だけで實際は矢張飼やはりかい放題、又「犬になつても大所の犬」という様な家畜根性こんじょうで悦よろこんで其横暴な飼主かに走る家畜も居いる。が表向き丈だけでも余り多く飼うのはいかんとなつたのでも、斯か様な怪けしからぬ牧畜業や奴隸制が漸ようやく廢すたれる徴候と見る事が出来る。

所で何にせよ強迫抑圧を加えた上で占領した家畜や奴隸の事だから、鞭むちを用うるのも適宜てきぎ以上を越えると、如何いかに柔順な者でも他の牧場に出奔しゅっほんしたり、他の飼主の懷ふとしころの中に飛込んだりする事もあるが、元来此様な事が何所どこでも行われるとなると、世間一般の牧畜業と奴隸養成組合が根本から崩潰するから、皆総掛りそうがりで斯か様な不心得者ふこころえものを袋叩ふくろたたきする事にきめてある。併しかし矢張我利我利根性やはりがりかの寄合の事だから、よその牛がおとなしくて乳を多く出すと聞くと、コツソリ家畜を取替とりかえて見ようなどと非望を起し、或あるいは其計画そのを実行に移したりして、不絶飼主たえず相互間の内輪もめが絶えない。殊ことに昔は某の飼牛と札をぶら下げてさへおけば、誰も指一本

出さなかつたものなのに、末世澆季ませうじょうきの今日こんにちになっては占有慾しゆうおんよく迄までが変態性を帯びて来て、態わざと
 そういう様な札付きの家畜のみをねらう不屈ふとくきなよその飼主ひんしんが頻々ひんひん出来てきて、所有権争しゆうけんそうい
 が喧かしましくなり、之これと同時に飼養家畜の「人道的」取扱とりあいも云々うんぬんされる様になった。

所謂「三角関係」というのは此所有権争しゆうけんそうの事で、「生活改善能率増進」と称する策の一部
 も奴隷の「人道的」管理法の事であろう。人は筋道立すぢみちたった事業を行いうて居いる時に何等弁解なんらを
 必要としない、唯何ただか不都合な後あとる暗い事をする時に限かぎつて「人道的」だとか「正義たぎの為」だ
 とか一種のお念仏ねんぶつを唱となえる。如是によせちくし畜生しよくしやう発菩提心はつぼだいしん、いいわけやお念仏ねんぶつを口にする丈だけ、まだしも
 しおらしいのである。

それから牛の乳を絞しぼる時に、清潔な牧舎で蓄音機音楽を聞かせると、平素より乳を多く出
 すのだが、近来特に云々うんぬんされる上すべりの「文化生活」も此類このたぐいの労働搾取法さくしゆでなかるうか。

結婚の三角関係は理論上存在不可能

扱さて斯様かような現在いまの悲しくも亦馬鹿馬鹿ばかばかしい有様ありさまから振返かへつて、私の云う「かくあるべき結
 婚」に戻るならば、其そのれは其本人そのほんじん二人同士互たがひに他たの中なかに全部没入めいじゆして、不絶たえず変化調整へんかていせいを続け
 る状態そのもの其物そのものであり、恋愛れんあいの如ごとき瞬間しゆんかんに完結終了くわんけつしゆうりゆうするものでないから、初めから他に発展はつぜんすべ
 き自己じこの余裕よゆうが保留ほりうされて居いない。即ち理屈すなわ上結婚の三角関係さんかくかんけいが出現しゆげんする事は不可能ふとくである。

蓄妾ちくしやうの如ごときは初めから奴隸制ときまつて居いるから、三角關係なぞの内へはてんで入つてこない。

今若もし一人の男おとこ或あるは女を中心として三人又は其その以上の異性が渦巻き廻まわつて居いる時に、恋愛ならば瞬間に事は決する。其その中の一つが真の結婚關係である場合に、他との連絡が又同様に真の結婚關係の如ごとき觀を呈して、其その三角關係が継続するならば、其等それらの關係はもはや真の結婚でなく、又もや昔からの奴隸制に戻り墮落したものである。即ち一つが征服者となり主人となり飼主となつた場合に於おてのみ、三角又は多角關係は可能である。一人の僕は二人の主に兼ね仕うる事は出来ぬが、一人の主は幾人でも僕を養う事が出来る。一人の飼主の周囲に数多の家畜が遊び戯あそんで居いても、其そのれは単に性的牧畜業であつて、飼主が男たると女たるとを問わず、真の結婚は其多角關係の開始と共に消滅する。即ち言を換かうれば、単数の對等關係が消滅した瞬間に、一個の主人を中心とする複数の主從關係が発生する事に外ならぬ。

現実暴露は改造の準備

所でかく理想論を高く振りかざして絶叫して見た所が、目前の字書と小説と家畜と奴隸とは依然として旧態を改めない。私は之等女性これらの自重心を傷つける様な色々な比喩ひゆを用いたが、現代日本の虐げられた女性の為ためを思えばこそ、此様な卒直な現実暴露を試みた。

呪うべき売笑制を痛撃し、之を支持する資本制度を憎んでも、此制度の犠牲となつた憐れな我々の姉妹を決して責める事は出来ない。我々眼前の性的奴隷制は即ち普遍的売笑制であり、之の撤廃を図る為には、女性自身のパンを求むる方法を根本からやり直さなければならぬ。其為の改造とは膏藥張りや其日逃れのごまかし細工の事でないのである。

まず第一に自己保存

あらゆる生物は自己保存を先ず第一の仕事として居る。人類の女性も亦第一の自己保存を図らなければならぬ。現在人間として生を続ける事が不可能ならば、是非も無いから奴隷に落ちぶれ、家畜に成下つても構わぬから、まず生物として取敢えず自己の存在を全うするというのは、男女の性を問わず誰でも同情すべき事であり、決して非難すべきものでない。常盤御前は清盛の奴隷となつて、僅かに自己と子供達の存在を全うした。世の多くの女性は二十世紀の今日に於ても、尚或意味に於ての常盤御前ではないか。

一夫一婦制と一時的変態

世界大戦の後多くの壮丁を奪われたドイツ、フランス、イギリスの婦人連の間に、一種既成道徳に対する懷疑の念が起り、その或者は實際行動を以て寧ろ多妻制を是認するかのよう

である。ストープス女史の著書によれば、オーストラリアでは戦死者の寡婦の団体 Scientific Motherhood と称するものが、国家奉仕の唯一の方法は母となる事にある、所で多妻制は道徳に悖るから、性交によらず、科学的方法を以て優良な男の精液を集め人為妊娠の法によるなら、自己を国家奉仕の為に捧げると決議した。斯様な非常の出来事は、矢張皆婦人自身が自己保存慾を異常な外界に適応せしめんとする試みであり、又多妻制の下に衣食足りれば寧ろ家畜となつても悠悠其日を過したいという心持もある。

純粹な意味で婦人の自立は今日の社会制度の下にあつては不可能なことから、之等の煩悶と努力とは当然であり且又同情に備する。理想家に云わすと、一度覚めた女が自ら斯様な恥ずかしい多妻制に屈服し、奴隷に退化して迄も生にかじりつくより、寧ろ人間として尊嚴を保つたまま自殺した方がいいとするのだが、成程それなら詩になる、芸術品になりもしようが、人類の社会全体は一体どうなるか。

私は生温かい唯物論者だから、矢張生存第一である。家畜となり奴隷となつて生を続けて行こうとする執着が有難い。現に我々の国内丈を考えて見てもわかる、啓蒙といい、解放といい、此熱心な運動が若し有効であつて、日本の女性全体が一度に覚醒して『人形の家』のノラの如く一斉に家出したら、其日からすぐ殆どすべての亭主は飯を食へさせて貰う事も出来ない。若し彼女達が皆ユーディットの様に短刀を懐に断乎たる決心をしたならば、其翌朝

多くの夫は其ふしどに屍となつて発見されるだろう。若しルクレチアの如く彼女達が自己の辱を憤つて、自らの刃に倒れたならば、我大和民族は一朝にして種切れになり、僅かに史上に其名を留めて永久に亡びてしまふだろう。幸か不幸か吾人の解放運動は此様な効果に至らしめる程に有効でない、又あらゆる女性が小説家の描写する程に芸術的でないのも亦勿怪の幸いである。

結婚生活は経済現象

一体私の云う理想的結婚にしても、之が継続的状态の問題であり、我々人間が霞を吸い霧を食うて居ない限り、食物を食うて生きて行かねばならぬから、勿論衣食住に就いて種々の経済的要件を具えなければならぬ。

まして今日の世間一般の性的奴隸制では徹頭徹尾衣食住の問題許りで、僅かに恋愛至上主義の絶叫で其乾燥無味な所に幾分か色艶を附けようと企てても、すぐに其メッキがはげて興醒めな現実の殺風景さが現れる。即ち此意味に於て今日資本主義制度の社会に於ける所謂結婚は、純粹の経済現象であり、衣食住を超越した芸術味などは到底求めて得られるものでない。得たと思つても其れは束の間の幻である、得て居ると信ずるのは頭の悪い自己瞞着である。

一夫多妻制は一時の変態

此故に私のいう結婚生活は絶対に一男一女間の関係であるが、一方純粹なる經濟現象としての世の所謂結婚に於ては、一夫一婦は永遠の鉄則でない。唯生物学上の原則として男女の数が略ぼ同数であるから、一対一の関係が維持されて居る丈の事で、例えば大戦後の歐洲各國の如く結婚可能な男女の數に俄に不平衡が生じると、忽ちに男に寄生せねば生きて行かぬ哀れな女達は、棘ある良心も衿ある自尊心も打棄てて、食わせて呉れる人に依り頼まなければならぬ。

妻となるは女として最も安定確實な生活法である。妻となる事が出来なければ妻に準ずる形式でも命あつての物種だから我慢する。此様なドン底に戀愛至上主義も何もあつたものではない。今若し又斯様な大戦が時々起つて數多の壮丁を遠慮無く大砲の餌食とするならば、男女數の不平等が可成永續して、或は一夫多妻制が今存する性的奴隸制の中でも是認される事もある。併し乍ら生れた人間の中から特に男のみを奪い去る様な戦神の末路が實際来たというならば、我等が今歐洲で見ようとする様な一種の一夫多妻制はほんの一時的存在をなす許りで、やがて二、三十年もたてば昔の通りの一夫一婦制に立戻るに相違無い。

如何となれば我等の細胞学の或信すべき仮説によれば、人間の性決定は卵受精の刹那に決

定される。そして人間では卵は性決定に没交渉であるが之これに對して二種の精子がある。一が卵に入れば男となり他が赴おもむけば女になる。此二種の精子は常に数学的正確さを以て同数生ずるのだから、男女の生れ出ずる比例は常に一対一である(戦後に男児が多くうまれるというのは法螺そらゆえだ。其故よし今の不平均があつても、やがて其れも元の平衡へいこうに歸するのは生物学上の鉄則なのである。

父を確かめる必要上の同棲

資本主義制の下に行われて居る此性的奴隸制は、斯かくの如く簡単な数の比例によつて、機械的に支配されて居る。尚其上なおそのに一夫一婦の継続的同棲を必要とするのは、生れた子に對して扶養者たる父を確かめねばならぬ、其事そのことである。

母子の間柄あいだがらは昔自然人の生活に於ても本能的に密に繋がつて居た。群民の中の乱婚から族長制度に移つた時、父が事業の後継者として又助手として子を求めたが、掠奪征服によつて得た多くの母によつて生ませた子との間に、真に血統上の連絡が確かめ得らるる事は、其時そのの父たる者の智情共に要求する所の事であつた。今吾人の「文明社会」の一夫一婦制に於ても、夫が妻の貞操を追究するは、当然の責任者たる前に、責任と義務の生じ來つた順序を確かめようとするのにある。

多くの利己的な男性は、其責任をいずれに帰してよいか疑わしい場合には極力逃げようともがく。子を抱えて自立の力がない哀れな女性はその際最も信頼するに足る男の足元に脆いて訴える。此時彼女の訴えの根拠ありなしに関係無く、其信頼に感激していざ引受けようという寛大なる男は極めて稀だ。斯様な性分が男子に特有なのだから、女性として危険千万な一婦多夫制を執るよりも、自己保存に確実な一夫一婦制に依頼する方が頗る賢明である。之をば私は婦人貞操の利己的（婦人の立場から）存在理由であると見る。即ち経済生活としての結婚は斯く一夫一婦制を以て必然の事実とする。

将来或は同棲が無用か

然るに将来に於て此関係は変らぬか。現代の血清診断学の進歩は異種動物の間の血縁関係を数量的に確かめるのに成功した（生物分類学に於ける蛋白反応）。其原理を更に進めて今父が不明な場合に、其子と数多の想像上の父との血清間に凝聚反応を試みて、真の父を決定しようという企てもある。当分其成功は疑わしいが、原理に於て有り得べき事だから、将来技巧の進歩と相俟って此予想の実現されるのは唯時間の問題であろうと思われる。

若し父子が必ずしも母との継続的同棲に入らず共確かめ得られるならば、是非共家を立つべき必要も失せるかも知れぬ。又婦人が男子の専制の下に降服せねば自立出来ぬ様な今日の

經濟組織が他の合理的のものに進化した暁には、其時こそ私のいう理想的結婚生活が世間一般に実現される時であろう。

我等何をなすべきか

然らば其理想実現の為に我等何をなすべきか。答に曰く、結婚生活は其根本に於て經濟生活である以上、其理想実現は經濟的手段による外はない。革命か漸進か、其れは各人の信仰に任せておく。

斯く将来に対する方針は定まったとしても、今日の我々の結婚生活はかくあるべきものといくら注文して見た所が、周囲が周囲だから到底徹底たるを免れない。人の心理にも惰性があるから、奴隷を解放しても早速に奴隷根性は抜け切らぬ、抜けぬ所に人間らしい所があると我慢する事だ。何事も一足飛びに行かぬから、まず古き革囊に新しい酒を盛ろう。中には弱りはてた囊がはち切れるのもあるが、其れは同情に価するとしても詮方無い、何しろ酒ばかり新しくても、新しい囊がまだ用意されて居ないのだから……。

今我々のなし得る事は内容を変える事丈である。外形を改めようとしても其れは膏葉張りかごまかしに過ぎない、ごまかしでない法を執ろうとすれば……？

至上主義一天張りは世間見ず

終りに臨んで恋愛至上主義を尚一度考えて見たい。私一人の解釈では、人生は蕎麦である、恋愛は其人生の蕎麦に添へた薬味である（譬えが頗る卑近である事は自分でも恐縮せざるを得ないが、古人の曰くと他人の云った事を引証する程博学でないから、やむを得ず自分の思いついた通り、安っぽい所を暴露するより外に仕方がない）。

恋愛という薬味の中にはわさびの様なピリツとするのもあり、唐辛しの様にただ辛いのもあり、必ずしもラヴは甘いものとも限らないのである。所が贅沢な連中は、薬味がなきや蕎麦なんかとても食べられたもんじゃありませんね、なぞと云って居る。

そういう自身でも此薬味を要求して居た一人ではあるが、併し人によっては薬味もなしにおいしく召し上って居られる人もある事を知って居るから、滅多矢鱈に薬味の有難味の宣伝は試みない。

プルジョアの小俵共がカフェーの卓にもたれ、毛唐の酒（其中実は軽蔑されて居る和製）の瓶とレットルとに酔い乍ら、此薬味のなくてならぬ理由を管巻いて居るのを傍聴して居ると、まるで蕎麦を食わず共薬味だけで命をつないで行ける様な話、翻って世間を見ると薬味にもありつけず、やっと「かけ」で満足して居る人の方が多いのである。

ブルジョアに濫用されんとする至上主義

更に他の方面から見れば、恋愛至上の叫びは虐げられた奴隷共のあきらめのはての捨てぜりふである。鉄鎖に繋がれて巨船を漕ぐもの共が、いつ板子一枚下の地獄に葬られる共知れぬはかない運命を悲しんで、歌いかわすその哀調である。歌う者は此世に望みのない余り、せめてもの心やりに、やるせない思いを歌に托して居る。奴隷を使う主人はその亡国の悲歌を彼等が歌うて居る限り、彼等がおとなしく勤勉に働く事を知って、安心して居られるのだ。腹の中から奴隷はどんな弱い音は吐こうとも、又我々自由人の体はたとい幾重の鉄鎖を以て縛られて居ようとも、我々の心を縛る鉄鎖は此世の中にないのだ。友よ、感傷に走せて望みある将来を失うてはならぬ。

(一九三二・十・三、しるす)

説のあらまし

一、此論文は、初め女よりも寧ろ男の読者に読まれる事の多いらしい『女性改造』の為に、私の見た理想的結婚生活の諸要件を述べ、之に関して現状の分析を試み、将来私の理想実現の為に進むべき方向を示し、併せて当世流行の恋愛至上主義の履き違えと悪用によって起り

得る危険弊害を指摘しようとして試みたが、改造社は之を『改造』の方に掲げた。

二、私のいう結婚生活とは、一人の男と一人の女とが、夫々予め多くの候補者を比べた上で自由に選み出して之こそ我配偶者と定め、そして互に同格な事を承認した上で、其後の一生を二人一体として送ろうと試みる継続的意志が行為に現わされたものである。

三、此結婚は其二人相互の幸福を第一の目的とする。産児は結婚生活の充実に伴う二次的（重大でないという意味ではない）現象であり、常態の結婚に於ける必然の結果である。但し或特殊の場合産児が其二人の存在を脅かすならば（出来得るならば）、彼等が科学的方法によつて第二次的現象の起るのも未然に防いで、累を第三者に及ぼさぬ様に注意する事も正しい事である。

四、恋愛至上主義の力説する白熱的恋愛は、私のいう結婚生活の初めにあつた方が其後の結婚生活を豊富にし、又此殺風景極まる現代生活にうるおいを与える為に望ましいとは思ふが、人各々の趣味や情操や人生観の違いもあるのだから、誰の結婚にも頗る芸術的な前奏樂がなければならぬと主張するのは、余りに行過ぎた事だと思われる。

五、日本の現代人の中で、多数の男は、一般に女性を内心物品や器械視して居る。即ち妻は彼にとって字引であり、其以外の女性は小説、詩集などの興味本位の読物と見做して居る。

六、今我々の眼前に存するのは人間同士の結婚生活でなくて、性的奴隸制又は私有財産制の一相たる性的牧畜業である。そして之は資本主義制の下に起る必然的現象であり、其撤廃

を計るはかるためには、何かの経済的、具体的方法によらねば、他の感傷的お念仏や抽象的お説教では、解決はおろか、諦めあきらめようにも諦めあきらめきれぬものでない。

七、理想的結婚では環境の如何いかにに係らず一男一女の関係であるが、一方現在の性的奴隷制に於ける一夫一婦制に、生物学的に定められた男女等数という鉄則の機械的支配を受け、尚女なおの側では確かな自己保存を全まうとしたいと望む利害得失上の考えを以て、支持されて居る。其故それゆえ機械的、便宜的な後者は、時として外界の突然変化によって一時的変化をなす事もあるが、やがて其内そのに又旧態に戻るにきままって居る。

八、瞬間的恋愛に於ける三角関係は可能であるが、直ただちに自然消滅する。理想的結婚の三角関係は理論上存在不可能である。即ち一見して結婚の三角関係(対等性を有する三角関係)と見えるものも、其れは一個の飼主の下に二個又は二個以上の性的奴隷が侍はべって居るのに過ぎない。

九、現在社会に於て婦人の自立は不可能であるから、離婚後彼女及び其附屬者が生活し得る方法を講じた上で、男女対等合意の上で離婚するのは、夫妻間の心的体的懸隔が到底回復し得ない程に遠くなつた場合に、当然である。其他軽率な選択や又は自発的意志の無かつた事等、すべて出発点を誤つたものの失敗破綻は、自業自得である。此間の消息を公表するのは、其後人の戒いましめとなつて大變結構であるが、互たがひに他を罵ののしり自ら独りでいい子になりたがるのは、其人の考えの浅はかさも見えすけて片腹痛い。

十、恋愛至上主義を無差別に誰にも押し売りするのは、世間見ずのオボッチャンの仕種か、色彩の乏しかった青春の日を徒らに過した中年者の返らぬ愚痴の繰言ではないか。更に一方恋愛の空名に唯詠嘆し涙を流して其日を過すセンチメンタリストの多くあるのを、他方では悦んで傍観して居るタイラントも居る。併し我等の心は縛られて居ないから、唯空想的に自らを虐げ、又は空想的に他を征服する様なはかない変態性慾に耽って居るべき時でないのだ。

（『改造』一九三三年新年号所載）

- 「結婚 三角関係 離婚」(『山本宣治全集』第三巻、汐文社、一九七九年四月) 所収。
- 旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- いくつかの漢字には振り仮名をつけた。
- PDF化には`LATEX 2ε`でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/science/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>